

おくやま ねこ
奥山に猫またといふものありて

(口語訳)

「人里離れた山に猫またというものがいて、人々を食うそうだと、(ある)人が言ったところ、「山ではないけれども、このあたりにも、猫が年を経て変化して、猫またになって、人を捕らえることがあるということなのに。」

と言う者がいたのを、なんとか阿弥陀仏とかいう、連歌を仕事のようにしていた法師で、行願寺の近くに住んでいた法師が聞いて、一人歩きをする自分は用心しなければならぬことと想っていたたちよ

うどその頃、ある所で夜が更けるまで連歌して、ただ一人で帰った時に、小川のほとりで、うわさに聞いた猫またが、狙いどおり足もとへすつと寄って来て、いきなり飛びつくやいなや、首のあたりをかみつこうとする。(その法師は)正気も失ったために、防ぼうとするけれども、力も(抜けて)なく、足も立たず、小川へ転げ込んで、「助けてくれ。猫まただ。おういおうい。」

と叫ぶと、家々から、(人々が)いくつものたいまつを灯して走り寄って見ると、このあたりで見知っている僧(法師)である。

「これはどうしたことだ。」

と言って、川の中から抱き起こしたところ、（その法師は）連歌で賞品を取って、（その賞品の）扇おうちや小箱などを懐ふところに持っていたのも、水の中に入ってしまった。かろうじて助かった様子で、這はうようにして家の中に入ってしまった。

（実は、その法師の）飼っていた犬が、暗いけれど主人とわかって、飛びついたということである。

【参考】

ある人、弓射ることを習ふに

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢もろやをたばさみて、的に向かふ。

師の言はく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢のちを頼たのみて、初めの矢になほざりの心あり。毎度、ただ、得失なく、この一矢ひとやに定むべしと思へ。」と言ふ。

わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。

懈怠けだの心、みづから知らずといへども、師、これを知る。この戒いましめ、万事ばんじにわたるべし。【第九二段】

(口語訳)

ある人が、弓を射ることを習うのに、二本の矢を手にはさんで持って、的に向かった。(弓の)師匠ししやうが言うには、「習いはじめの人は、二本の矢を持ってはいけない。二本めの矢をあてにして、最初の矢にいいかげんな気持ちが出る。いつも、ただあたりはずれに心を奪うばわれることなく、この一本で決めようと思え。」と言う。

わずかに二本の矢である、師匠の前でその一本をいいかげんにしようと思うだろうか(思いはしない)。なまけ心というものは、自分では気づかなくても、師匠は、これをよくわかっている。この訓戒くんかいは、万事に通用するだろう。